

りんごの王様「ふじ」の誕生

今ではくだもの代名詞といってもいいりんごですが、日本で本格的なりんごの栽培が行われるようになったのは明治時代です。

現在みなさんが食べているりんごの原型は、コーカサス地方などに自生していた植物で、それがヨーロッパで改良を重ねられて古い品種が作られました。

日本には、それらの品種が明治時代にアメリカから導入され、その中に‘ロールスジャネット’と‘ジョナサン’という品種がありました。これらはそれぞれ‘国光’と‘紅玉’という日本名が付けられ、その後100年間にわたって日本のりんごの基幹品種となりました。

それでは現在最も良く目にする品種である‘ふじ’はどのようにして誕生したのでしょうか？。

‘ふじ’という品種は、農林水産省が昭和14年に‘国光’を母親に、‘デリシャス’を父親にして作った種子から育成したもので、昭和37年に命名登録された品種です。

‘ふじ’は、命名から60年以上がたちますが、食味や日持ち性が良いことから、現在も日本のりんご生産量の約6割を占めています。

この品質の高さは海外にも注目されており、アメリカやヨーロッパ、中国など世界各地で‘ふじ’が栽培されています。

ところで、この‘ふじ’という名前にはどういった由来があるのでしょうか？

この名前は、交配が行われた場所である農林水産省園芸試験場東北支場のあった青森県藤崎町の「藤」という文字に由来するという説があります。それに加えて日本の象徴である「富士山」をイメージさせることも由来のひとつとされています。

なお、‘ふじ’の原木は盛岡市にある独立行政法人農業・食品産業技術研究機構果樹研究所リンゴ研究領域のほ場に植えられ、いまでも現役として果実をつけています。

また、‘ふじ’は新品種育成の際の親品種としても利用されています。

そういった意味でも、‘ふじ’はこれからも日本のりんごの主役として活躍していくと思われれます。

‘ふじ’の子供たち



千秋
(東光×ふじ)



トキ
(王林×ふじ)



こうこう
(弘大1号×ふじ)



シナノスイート
(ふじ×つがる)